

【研究ノート】

## 鹿野思想史学の展開 ——『鹿野政直思想史論集』を読む

太 田 哲 男

キーワード：戦後歴史学 民衆思想史 社会史 女性史 沖縄論

### はじめに

私が大正期の思想家たちの仕事に取り組みはじめたのは1970年代の後半だったが、そのときに手引きとなった何冊かの著作のうちに、鹿野政直（以下、敬称を略す）の『日本の歴史第27巻 大正デモクラシー』（小学館、1976年。以下、『大正デモクラシー』）、『大正デモクラシーの底流 土俗、的精神への回帰』（NHKブックス、1973年）があった。それ以降、私は鹿野の諸著作には、長きにわたり多大な恩恵をこうむってきた。『近代日本の民間学』（岩波新書、1983年）、『歴史のなかの個性たち』（有斐閣、1989年）からも、論じられている人物に大正期の思想家が多かったから、刺激を受けた。『「鳥島」は入っているか 歴史意識の現在と歴史学』（岩波書店、1988年）、『現代日本女性史 フェミニズムを軸として』（有斐閣、2004年）も、発売後まもなく読み、視圏を広げられたという思いを深くした。多くのばあい、丹念な参考文献注が付されていることも、じつにありがたかった。（その丹念さは、『岩波新書の歴史』（岩波新書、2006年）にも遺憾なく発揮されていて、新書の有益なガイドブックにもなっている。）『日本の現代』（2000年）などの「岩波ジュニア新書」も、授業用の教材として、おおいに重宝した。

その後、2007年から08年にかけて、自選の『鹿野政直思想史論集』全七巻（岩波書店。以下、『思想史論集』）が刊行された。その最初に出た第一巻には、上記の『大正デモクラシーの底流』と『近代日本の民間学』が収められ、いずれもかつて自分なりに読み込んだ著作だったこともあり、『思想史論集』で再読することをしないうまま、時が流れてしまった。

その後に出た『沖縄の戦後思想を考える』（岩波書店、2011年）では、「沖縄の戦後思想」が、そして「沖縄の戦後」がなんとあざやかに描かれていることかと思った。さらに、新城郁夫・鹿野政直『対談 沖縄を生きるということ』（岩波書店、2017年）に接して驚いた。というのは、第1に、この本の巻末に「戦後沖縄・歴史認識アピール 沖縄と日本の戦後史をめぐる菅義偉官房長官の発言に抗議し、公正な歴史認識をともにつくることを呼びかける声明 二〇一五年一月二四日」（『世界』2016年1月号に発表）<sup>（注1）</sup>が収められ、「運動」と関わるところが少ないと思われていた鹿野が（家永教科書裁判で証

言に立った経験はあるが) 4人の呼びかけ人のひとりとして名前を連ねていたからである。第2に、鹿野自身が2016年に沖縄・高江での「ヘリパッド」工事に反対する座り込み行動に参加したとして、そのときの様子などがやや立ち入って語られていたからである。

このアピールによれば、「二〇一五年夏、米軍普天間飛行場の代替施設として沖縄県名護市辺野古に新基地を建設する問題の是非をめぐって、沖縄県と日本政府のあいだで一カ月にわたる集中協議」が行われたが、議論はほとんどかみ合わず、9月7日に決裂した。「普天間飛行場が戦後に強制接収されて建設されたことが現在の普天間問題の原点だとする沖縄県側の主張」に対して、菅官房長官は「賛同できない。日本全国、悲惨な中で皆さんがたいへんご苦勞されて今日の豊かで平和で自由な国を築き上げてきた」と反論した。

これに対し、鹿野たちのアピールは、この菅官房長官の「発言にみられる歴史認識は、沖縄と日本の戦後史、あるいは現在にいたる日米両国の対沖縄政策の歴史を、主観的な思いこみを頼りに自己流に解釈した無責任なもの」として抗議し、「発言の撤回」を求めるというものである。

この『対談 沖縄を生きるということ』には、新城と鹿野の間にかわされた3回の対談が収録されているが、その3回目(2016年12月5日)において、鹿野はこの菅発言について次のように述べている。

これをそのまま見過ごしたら、あの発言が日本を制圧してしまうのではないか。それでいいのだろうかと思った。曲がりなりにも沖縄のことを勉強してきた人間として、一体何のために勉強してきたのか、その意味が問われるというより、むしろ問わなければ自分が崩れていく感じがしたのです。(147～148頁)

これを読み、私自身に何かができるわけではないけれども、せめて鹿野の著作を読み直してみようと考えた<sup>(注2)</sup>。

そう考えつつさらに時が流れてしまったが、大学を退職したのを機会に、『思想史論集』全七巻を読んだ。この7冊が出版されてから、なんと10年以上が経過してしまい、いまごろになってこの本について何かを書くなど、証文の出し遅れたるや甚だしく、著者には失礼であると思う。言い訳のようだが、ここに紹介したような沖縄論が出てくるに至る航跡をたどることができればと思う。

## その著作

まず、この『思想史論集』の収録作品を概観しておこう。『思想史論集』第七巻巻末に「鹿野政直著作目録」(単著・共著・編著・共編著のみ)が掲載されている。そこには、『日本近代思想の形成』(1956年)から『思想史論集』(2007～08年)まで、ほぼ半世紀にわたる70点ほどの著作が並ぶ。『資本主義形成期の秩序意識』(筑摩書房、1969年)という600頁を超える浩瀚な著作もあれば、中国語版や韓国語版も含まれている。むろん、この「目録」以外にも、おびただしい数の論文があるから、それらを併せて「鹿野政直全集」とするとすれば、いったい何冊になるであろうか。

おそらくは、昨今の出版界の事情もふまえての結果であろうが、諸著作が『思想史論集』全7冊として刊行された。となると、鹿野の仕事をどのように7冊に編集・配列するかという問題が生じる。そこで、(1) 初期の著作・概説的な著作を割愛、(2) 7つのテーマを立てて各巻に命名、(3) 各巻をⅠ・ⅡまたはⅠ・Ⅱ・Ⅲと区分して編集、ということになったようである。以下に、その7冊の構成を示しておこう。( ) 内は、初出あるいは底本を示す。\*はその著作の一部を収録したもの、\*\*はさまざまな著作の一部・論文を収録したものであることを示す(必ずしも厳密な区分ではなく、目安と受けとっていただきたい)。

#### 第一巻 大正デモクラシー・民間学

Ⅰ 大正デモクラシー 救済のゆくえ(『大正デモクラシーの底流 土俗、的精神への回帰』1973年)

Ⅱ 民間学 運動としての学問(『近代日本の民間学』1983年)

#### 第二巻 女性 負荷されることの違和

Ⅰ 戦前・「家」の思想(『戦前・「家」の思想』創文社、1983年)

Ⅱ 「女であること」への問い(『現代日本女性史 フェミニズムを軸として』2004年\*)

Ⅲ 負荷への挑戦\*\*

#### 第三巻 沖縄Ⅰ 占領下を生きる

Ⅰ キーストーンの刻印(『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社、1987年\*)

Ⅱ 憤怒と凝視(同上\*)

#### 第四巻 沖縄Ⅱ 滅却に抗して

Ⅰ 伊波普猷とその時代(『沖縄の淵 伊波普猷とその時代』岩波書店、1993年)

Ⅱ 伊波普猷以後\*\*

#### 第五巻 鑄なおされる心身

Ⅰ 健康観にみる近代(『健康観にみる近代』朝日選書、2001年)

Ⅱ 兵士であること(『兵士であること 動員と従軍の精神史』朝日選書、2005年)

#### 第六巻 個性のふるまい

Ⅰ 個性たちの国家構想(『近代精神の道程 ナショナリズムをめぐって』花神社、1977年)

Ⅱ 歴史のなかの個性たち(『歴史のなかの個性たち 日本の近代を裂く』有斐閣選書、1989年、ほか\*\*)

#### 第七巻 歴史意識と歴史学

Ⅰ 「鳥島」は入っているか(『「鳥島」は入っているか 歴史意識の現在と歴史学』1988年\*)

Ⅱ 化生する歴史学(『化生する歴史学 自明性の解体のなかで』校倉書房、1998年\*、ほか)

Ⅲ 問いかけの史学\*\*

外見的にすぐに気づくところは、次の2点である。第1に、収録された単行本としては、『大正デモクラシーの底流』が時期的に最初のもので、それ以前の単行本は収録されていない。第2に、第三巻は『戦後沖繩の思想像』の一部分を収め、第四巻のほぼ8割は『沖繩の淵』が占めるが、それ以外の巻は、基本的に2冊の単著を収めている。

第1の点は、「近代」を対象とした1950年代から70年代初頭の諸作品（『日本近代思想の形成』『資本主義形成期の秩序意識』『日本近代化の思想』など）がこの『思想史論集』になぜ収録されなかったかにかかわる。その主要な理由は、歴史の進行とともに、「近代」が「はるかに比重の軽い観念」となった（第一巻、「わたくしと思想史」x頁。以下、これを「一、x」のように、巻数・頁数のみを注記する）とする著者の判断だろう<sup>(注3)</sup>。

第2の点は、5つの巻が2冊の単行本を収録したために、刊行年次が錯綜する印象をつくったことにかかわる。だが、第一巻から第五巻までは、各巻の最初に収録された単行本・刊行年を（副題を外して）列挙すれば、第一巻『大正デモクラシーの底流』（1973年）、第二巻『戦前・「家」の思想』（83年）、第三巻『戦後沖繩の思想像』（87年）、第四巻『沖繩の淵』（93年）、第五巻『健康観にみる近代』（2001年）となり、刊行年代順になっていることがわかる。それに対し、第六巻収録の『近代精神の道程』（1977年）、第七巻収録の『「鳥島」は入っているか』（88年）は、その時系列にはそぐわない。それは、この第六・七巻が、鹿野思想史学のいわば学問論、方法論あるいは認識論に主としてかかわるものであって、限定的な分野（対象）を論じた第一巻から第五巻とは性格が異なるという著者の判断によるものであろう。今これを、第六巻の位置づけについてのみ、ごく手短かにいえば、「社会事象」をではなく、「個人ないし個性にこだわって」（七、433）その足跡を追うという手法によるといえよかろうか。そして、第六・七巻に収められた単行本4冊は、ほぼ刊行順に並んでおり、このようにみれば、全7冊を通じて整然とした編成である。

鹿野が長きにわたって膨大な資料を読み込み、研究を重ねて成ったこれら諸著作は、近現代日本思想史の宝庫である。と同時に、歴史学界の最前線をつねに歩んできた鹿野の作品をたどることは、歴史学・思想史の流れを再確認することでもあり、みずからの「勉強ノート」をとるつもりで、この『思想史論集』についてのコメントを記しておくことにしたい。

## 近代と現代

鹿野政直は、1931年8月20日、今井政直として大阪の岸和田で誕生した。「今井政直」も「岸和田」も、鹿野思想史学にとってみのがせない意味をもつことになるが、それはのちに述べるとして、まず、1931年生まれについて。

鹿野がこの世に生をうけてまもない9月18日、柳条湖事件が起こった。「満州事変」の始まり、15年戦争の始まりである。鹿野は、この年に生まれたことについて、のちに『兵士であること』において、「十五年戦争が十八、九年戦争になっていたら、ほとんど確実

に「兵士」であったに違いない一人として、この稿は書いた。」(五、320)と書きつけた。「兵士」であったなら、「敵」への「加害」を余儀なくされたであろうし、戦死も当然あり得た、という認識であろう。

また、『世界』(1955年8月号)に、読者からの投稿で「私の八月十五日」という特集が組まれたが、そのなかの1篇に「人間の魂は滅びない」と題されたものがあったという。

四五年の八月一五日に臨んだとき、くやしいというよりもっと複雑な気持ちがあった、「それは、戦争も「やめられる」ものであったかという発見であった」と、こういう一句があったのです。〔中略〕戦争というのは永久に続くものだと思っていたわけです<sup>(注4)</sup>。

鹿野は、この文章を読んで「非常にびっくりした」と同時に「アッ、これだ!」と思ったと述べている。

1931年に開始された「満州事変」、37年7月7日以降の日中戦争、41年12月8日以降のアジア・太平洋戦争と続く時代であり、「戦争のない時代は知らない」という少年時代であった。その時代の感覚がこの投稿の1篇に象徴的にあらわれていた、ということであろう。

日本の敗戦により、事態は大変動をとげる。「民主主義」が氾濫する状態となった。『思想史論集』第七巻「まえがき」によれば、

学生として歴史学の分野にまぎれこんだ一九五〇年前後は、いまから思えば戦後歴史学の高揚期に当る。皇国史観の重しから解放されて、マルクス主義史観を軸に、新しい歴史を創ろうと(そこには、書かれたものとしての歴史という意味ばかりでなく、事実としての歴史という意味も込められていたが)、過剰ともみえるほどの活気に満ちていた。(七、iii)

というのである。その先陣を切っていた歴史学者たちは、戦後歴史学<sup>(注5)</sup>の「第一世代」ということができよう(石母田正『中世的世界の形成』(1946年)、遠山茂樹『明治維新』(1951年)などをイメージすればよからう)。それと同時に、「のちに「近代主義」として対象化される思想の洗礼を浴びた。封建遺制を批判するその論鋒は鋭く、切れ味の鮮やかさはきわだってみえた。」(七、424)。それらは、日本に真の意味の「近代」をめざす動きとも位置づけられた。

めざされる近代の観念は、一九四五年の日本の降伏とともに(より正確に言えば、戦時中から伏流としてあったとのちに知るが)、維新にはじまる日本の近代の全体を問い直し、そこから半封建性あるいは封建遺制を抉りだし、より完全な「近代」を求めようとの志向を基盤に噴きだした。さまざまなかたちをとりながらもそれは、制度改革に止まらない(あるいはその前提としての)人間変革の主張を打ちだした。一〇代半ばから後半にかけてのわたくしは、そこによりやく未来を見いだしたと思った。(一、vii)

この「第一世代」の思想の洗礼を浴びたひとりであった鹿野は「いわば第二世代に当る

一人」という自覚をもっていたという。

それが、1970年前後に大変動をとげる。その変動は、日本社会自体の変動すなわち高度経済成長とその結果ともいえるものだった。「めざされる近代」あるいは「希望としての近代」は、「一貫する経済拡張路線のうえに、豊かさとしての近代に具体化することとなった。それは、日本を、それまで宿痾と目されていた貧困から離脱させ、日本の成功として達成感を瀾漫させていった」(一、vii)。

その半面で、「高度経済成長として具現した日本の近代は、公害—環境破壊を軸として、人間や生命に対する加害性・抑圧性を露呈していった」(一、viii)。この転換を鹿野に強く意識させたものは、「一九六八年の明治百年祭と翌六九年から七〇年にかけての…学生反乱」であった。こうして、60年代末以降、鹿野の「近代」の位置づけは変化する。「希望としての近代」は、「問われる近代」に転換した。

「明治百年」というが、「維新以来の百年を栄光で塗りつぶしていいか」という問いに直面し、これに対する鹿野の応答が「田中正造の『発見』」となった。そのばあい、「問われる近代」とはどういうものか。それは、維新変革が「どのように可能性を押しひしめていったか」に眼を向けるということであった。

## 田中正造論と民衆思想史

『思想史論集』第六巻には、田中正造論が3本収録されている。その3本の発表時期は、1968年、83年、89年である。89年の論考は、『田中正造選集』七「法と人権」に付された「解説」であるが、最初のもは、「明治百年祭」の年に発表された論文である。

大企業による公害である渡良瀬川流域の鉍毒の問題、その後が生じた国家権力による土地収用である谷中村遊水池化の問題。「この問題が文明の名によってもたらされたとき、それとの闘いをつうじて、田中正造と彼の周囲の農民たちは、もっとも本源的な民主主義思想を鍛えあげていったように思われる。」(六、251)という評定は、維新以来の百年が「栄光で塗りつぶしていい」ものではないということを明確に押しだすものであった。

それは、田中正造評価のいわば「質」にかかわるものでもあった。田中の著作はかつて『義人全集』全五巻(1925～27年)によって知られていて、「義人」というイメージで把握されることが多かった。しかし、鹿野は、『義人全集』などを徹底して読み込み、「田中正造は、たんに義人ではなく、典型的な自立的市民精神の体現者として立ちあらわれる」とし、さらに、「彼は実践においてのみ偉大だったのではない。むしろ彼は、明治におけるもっとも偉大な民主主義国家＝人民国家の構想者(そうしてそれへの実践者)の一人であった」(六、262。傍点原文)と結論づけた。

83年発表の田中正造論は、「いま、学生たちと田中正造を読んでいる」と書き出されている。そして、学生たちと田中正造を読むのは二度目であって、最初は「十余年もまえ」というから、68年の論文を書いたころなのであろう。そのときは、木下尚江編『田中正造之生涯』(1928年)をテキストとしたが、二度目は『田中正造全集』(岩波書店、1977

～80年)をテキストにしていると書いている。この『全集』で、

正造の足跡がなんと細部までわかるようになったかと、行を追いつつ思わず歎声を発することが多く、あらためてこの全集編纂者たちの労苦と見識に敬意を表する日々である。その意味で一九七〇年代は、わたくしの専門とする思想史の立場からいえば、田中正造という人物が一個の思想家と位置づけられ、さらに日本思想史上にその地歩を定着させていった時期をなしている。正造を押しだそうとする社会的ボルテージが高まったからであるが、もとより根本的には、全貌が明らかになればなるほど光彩を増すという彼の思想の質のゆえにほかならない。(六、265-6)

と述べている。『全集』に接したときの臨場感が伝わってくる(七、139も参照)。

鹿野が田中正造を新たな「質」において「発見」したのが1960年代末、つまり、大学紛争の時期だったというが、その時期に鹿野は、大正デモクラシーの時期の研究にも取り組みはじめていた。そして、その成果が、この小論の冒頭にあげた『大正デモクラシー』(1976年)、『大正デモクラシーの底流』(1973年)だったのである。それまでの戦後歴史学のなかで、むしろ「大正デモクラシー」の研究は行われていた。その動向について鹿野は、「推測するに、戦後民主主義をより足腰のつよい理念にしようとの意志が、多かれ少なかれモチーフとなっていた」(一、xvi)と判定している。だが、大正デモクラシー期の思想の解明について鹿野のめざしたところは、それとは異なり、次のような方向であった。

そこでの主題は、デモクラシーの「明治」的秩序からの離陸ないし飛翔でなく、なぜそれが、ファシズムへ雪崩れていったのかの検討であった。それが、跡形もなく消えうせてしまっていた(と思われた)という少年期の経験が、そんな視点をどこかで後押しした。

また、1910年代は、第1次世界大戦を契機として「成金」を生み出した時代であり、河上肇の『貧乏物語』(1916年、新聞連載。刊行は17年)に示されるように、貧富の「格差」が顕著にあらわれた時代でもあって、その「格差」の露呈が、「デモクラシー」運動、「社会運動」興隆の機運をもたらした。「とともに、社会の流動化によって、「投げ出された、人びとを多く析出した。そこに醸し出された「不安」は、どこに拠り所を求めたらよいのか」。そこに戦後の恐慌がおそい、「不安」は「閉塞」感へと二乗化されようとする」(一、429)。

こうした流れのなかで、「デモクラシー」運動に挺身した人びとに焦点を当てるか、「投げ出された、人びとに論の軸を置くかで、歴史叙述が大きく異なるものとなるのは明らかであろう。「わたくしもそのなかにいた戦後歴史学の、進歩か反動かの二者択一的史観、民主化・近代化を軸としての上昇発展史観によっては、放置される部分があまりに大きいとも思った」(同)という。

『思想史論集』に収められた『大正デモクラシーの底流』は、このような視角からの、別言すれば「民衆思想史」の分野における研究成果であった。

『大正デモクラシーの底流』は、「創唱宗教の思想——大本教と「立替え立直し」への衝

迫」「青年団運動の思想——長野県上田・小県地域の青年たちと農村受難の想念」「大衆文学の思想——中里介山と『大乘、の観念』の三部構成になっている。はじめの二つが「民衆思想史」の作品だということは、その表題からもうかがえる。そして、中里介山の長編小説『大菩薩峠』の「机龍之介は、おそらく猿飛佐助と並んで、大日本帝国確立期の日本の民衆が生み出した二大英雄であった」（一、153）という位置づけから、これまた「民衆思想史」的視角からの叙述となった。

1960年代から70年代にかけて、「民衆思想史」が歴史学の一角をなすものとして登場してくる。これは、日本だけの現象ではないし、また、「民衆思想史」をどう把握するかによっても話は異なる様相を呈するが、当時の日本史分野での「民衆思想史」の主たる担い手は、色川大吉（1925～）、安丸良夫（1934～2016）、そして鹿野であった。

色川、鹿野、安丸の鼎談が、雑誌『図書』（2009年3月号）に掲載されたことがある<sup>（注6）</sup>。そのなかで、色川は1960年の安保闘争と秩父から三多摩の自由民権運動とを重ねて、次のように語っている。

〔自由民権運動時代の〕困民党というのは、安保闘争でうちひしがれた中小の労働者とか農民、あのデモに参加していた零細企業の労働者たちです。そのエネルギーに感動したんですよ、安保闘争の中で。

自由党というのは引き回していた連中です。国会会議とか、社会党、共産党、あるいは大企業の労働組合のボスたち、幹部たち。それと困民党との対立というのが意識の下にあったんです。

また、「明治百年祭」の企てのあった1968年、色川たちは「五日市憲法」を発掘していた。それをふまえた色川の『明治の文化』（岩波書店、1970年）は、私も刊行後まもなく読み、こういう「文化」の把握があるのだと教えられた。安丸良夫らの編んだ『民衆運動の思想』（日本思想大系、岩波書店、1970年）も同じ年の刊行である。

私は、1975年になって大学院を中退し、都内にある高校の社会科教員になった（当時の担当は「倫理社会」）。教科書に記述があったわけではないけれども、安丸の『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、1974年）、色川の『ある昭和史 自分史の試み』（中央公論社、1975年）、鹿野『大正デモクラシー』などを、むろんごく局部的にはあったが、授業の教材として借用した。私の大学院時代の専攻は倫理学で、とくに日本史について勉強していたわけではなかったが、日本史学上の新たな波を、あるいはその熱気を、私なりに感じていたのだと、40年ほど前を回想する。

ここに、安保闘争を通じての体験が民衆思想史的な観点に連なったというおもむきの色川の回想を一瞥した。その回想は、なるほどと思わせるものがあるが、鹿野が民衆思想史に向かった理由には、色川のばあいと異なる面もあったと考えられる。

## 女性史

それを検討する前に、鹿野が、今井政直として大阪の岸和田で誕生したという点につい

てふれたい。

まず、「今井政直」として誕生したということについては、『思想史論集』第二巻Ⅰの「はしがき」に説明されている。鹿野政直の父親は、今井という家の娘と「恋仲」となり、その女性が妹とふたりだけの子どもであったため、結ばれるためには婿となるほかはなかった。そして誕生したのが政直だが、彼は母親の祖父母にもっばら育てられた。「祖母ッ子としてのひよわさ」をもちつつ成長したが、政直11歳のとき、母親が病死した。母親の両親と政直の父との間に、「はげしい罵りあい」があり、政直とそのきょうだいは、父親に連れられて今井家を出て、父の旧姓・鹿野を名告るようになった、という。鹿野は、このあたりの人間関係をもう少し立ち入って説明しているけれども、それはともかくとして、こうした体験が、ご自身では「家族崩壊」と述べられている<sup>(注7)</sup>が、「家」制度について、あるいは「女性史」に対して、鹿野が深い関心をもつようになる前提をつくった、というのである。

もうひとつの、大阪は岸和田生まれという点について、鹿野は、岸和田が「戦間期に沖繩から流出した人びとが不熟練労働力というかたちで多く来ていたところ」です。そこで子ども時代に二つの名前に出会ったことが、自分の人生の大きな出発点になっている。これは戦争中の一番強烈な記憶です。ひとつは大山一という名前で、もうひとつは儀間カマドという名前でした。<sup>(注8)</sup>と述べている。

「不熟練労働力」の集まる地域には、むろん「朝鮮人労働力」も吹き寄せられていた。このふたりについての鹿野の回想は、いささか長くなるが、次のようである。

大山一というのは国民学校の時代の上級生のときに、在日の少年と同級生であって、そこで教室のなかで先生が「お前をこの教室では日本人にしてやる」と言った。「しかし朝鮮人は愚か者だから、難しい名前を付けても覚えられないだろう、お前でもわかるような名前を付けてやる」と言って、大山一と黒板にこう大きく書いた。僕はいまでも覚えているんです。すごいショックでね、それは子供心にも。それがひとつです。

もうひとつは儀間カマドさんですけども、わが家が戦争中に崩壊しましてね。僕は今井という名字から鹿野に代わったんです。この家から逃れたいという強い一心で、海岸べりかなんかに行って孤独をかこっていたんです。そのとき、たまたま声をかけてくれたのが中年の女性で、その人の名前を聞いてびっくりした。それが儀間カマドさんだったんです。あの地域社会のなかでこの名前を掲げて生きていくのはつらからうと思いました。〔中略〕極めて非政治的、個人的な考えにすぎないのですが、それがいまに残る戦争中の一番強烈な記憶です。

教室内の「創氏改名」が教員によってなされたという次第であるが、そのとき同じ教室に合わせたすべての児童が「すごいショック」を受けたかどうかはさておき、鹿野少年には、この苦しみをともに苦しむ感受性があった。

先に、色川の安保闘争期の経験にふれた。彼にとってのこの強烈な経験を背後にもつ自

由民権運動期の叙述が、「民衆思想史」「民衆史」といっても、「人民闘争史」的な色調を帯びることはふしぎではない。だが、大山一少年の苦しみ・悲しみに「共苦」のまなごしを送り、儀間カマドという沖縄出身の女性との出会いの経験を「戦争中の一番強烈な記憶」<sup>(注9)</sup>とする人物が描き出した「民衆思想史」が、「人民闘争史」的なそれとは別の色彩のものになったことは、これまたふしぎではない。色川に「戦争中の一番強烈な記憶」を問えば、おそらく学徒出陣のことであろう。両者の歴史叙述やテーマに差異が生じた要因はいろいろあるにせよ、戦争を（たとえば日米開戦を）何歳で迎えたのかも見逃せない。

鹿野のばあい、「戦後歴史学」に対して抱くに至った違和感が、やがて「家」の問題、「女性史」などに向かっていくのは、自然なことともいえた。『思想史論集』第二巻に収められた『戦前・「家」の思想』（1983年）、『現代日本女性史』（2004年）は、その方面の代表作である。そして、これらの作品が、膨大な資料の読み込みによって支えられていたことはもちろんである。

1970年前後から「民衆思想史」的著作の刊行が次第に目につくようになったのには、いろいろな条件があるにせよ、見逃せないことは、画期的というべき「資料」のあいつぐ刊行である。「民衆思想史」としてくくってよいかはさておき、いささかの例示をしておこう<sup>(注10)</sup>。

女性史学でいえば、『日本婦人問題資料集成』（ドメス出版、1976年～81年）がその代表的なもので、鹿野はこの『集成』について、「女性史学に何かを積み重ねたばかりでなく、その質を変えようとする力を備えていた」と述べている。「既存の近代日本史像にたいしてこの構成がもつであろう衝撃力の凄さ」に感銘し、「出るまえと出たあとでは完全にその分野の段階を変えてしまった」という感じを抱かせる出版物が「たまにはある」が、この『集成』はまさしくそれだ、とする（二、376以下）。

先に、『田中正造全集』の意義について言及したが、この刊行が1970年代だったことをあらためて確認したい。また、鹿野は、沖縄論に打ち込むことになるが、その『沖縄県史』のうち、多数の住民の証言を集めた1000頁を超える「沖縄戦記録1」の刊行が1971年であった<sup>(注11)</sup>。

そのような資料群を鹿野は、じつに丹念に読み込んだ。それを示す例を女性史に関してひとつだけあげれば、鹿野政直・堀場清子『祖母・母・娘の時代』（岩波ジュニア新書、1985年）に次のような記述がある。

おびたしい数にのぼる女性向けの教訓書に目をさらしてゆくとき、ことにそれらが二〇世紀初めのころまでにあらわされたものである場合、ふと異様な感におそわれることがあります。その多くが女性向けの著作であるにもかかわらず、「青春」を、彼女たちの人生のなかでひとつの時期と位置づけ、そこに固有の意味をみとめようとする視点が、きわめて少ないからです。（86頁）

「青春」ということばの登場の少なさに驚くというのだが、それはまさしく「おびたしい数」の女性向け教訓書に目をさらさなければ出てきにくい判断であろう。「ない」こ

とに気づくのは、「ある」ことに気づくよりも難しい。ついでながら、この本は「ジュニア」向けとされるシリーズの一冊であるから、「ジュニア」にも読める文体になっている。しかし、内容的には「専門」書のレベルを下げたというようなものではなく、充実した内容を備えている。

鹿野は、こうした「驚き」や「異様な感」をバネに、資料を読み込み、そこからすくいあげたところを明晰に読みやすく表現し、女性史学の豊穡化に向けて尽力したのであった。

資料を読み込んだというのは、量的なことだけではない。鹿野は、「原爆文学について——神奈川近代文学館「原爆文学展」をみて」（初出、2001年）で、大田洋子の『屍の街』（1948年）の原稿をみたときのことを書いているが、『屍の街』の一節に眼を注ぐ。

「きのうは、三、四日まえ医者の家で見かけた人が、黒々とした血を吐きはじめたときき\*、今日は二、三日まえ道で出会ったきれいな娘が、髪もぬけ落ちてしまい、紫紺いろの斑点にまみれて、死を待っているときかされる」

この「ときき」の部分が、「どの版でも」「吐きはじめたとき」となっていて、「それでは平仄が合わない」と思っていたけれども、『屍の街』の原稿をみて、「とき」ではなく「ときき」だったと確認した、と書いている（五、404）。つまり、じつに綿密に資料や作品を読み込み、調べ、不明箇所を反芻していることを、この事例は端的に示している。

相次ぐ資料の刊行の前提に、社会それ自体の変化、このばあいには則していえば、フェミニズムあるいはウーマン・リブ運動の世界的な顕在化があったことはいうまでもない。

その動きは、国連の動向に顕著にあらわれた。1976年から85年が「国連婦人（女性）の10年」とされ、79年には総会において「女性差別撤廃条約」が全会一致に近い形で採択され、日本政府も対応を迫られた。

いずれにせよ、世界的な社会変動が、女性史学を大きく活性化していたのである。

## 社会史

フェミニズム運動の顕在化と書いたが、東京でウーマン・リブ運動の集会在開催されたのは、1970年10月21日であった。同年11月に召集された臨時国会は、「公害国会」といわれた。日本経済の「高度成長」は続いている時期ではあったが、その「矛盾」が顕在化した。その半面、「戦前から引きつがれてきた日本資本主義の特質ともいべき「貧困」は、「中流意識」へと大きく席を譲った」（七、61）。高度経済成長は、「戦前」への緊張感をもつ「戦後」意識を消滅させる方向に作用した。

鹿野が1970年からさらに年月が経過したのち、彼の『「鳥島」は入っているか』に、次のように書いている。

戦後四〇年を経て〔中略〕歴史学においてもまた、一つの時代が過ぎ去ろうとしているのである。そのことは、「戦後」という課題を負い、しばしばそれを護符としてきた戦後歴史学が、その課題の変質という事態に直面し、未来を探ろうともがきつつあることを意味する。（七、28）

もう少し細かくみれば、この時代に「戦後」意識は「自然に」影を薄くしただけでなく、政策的に消されていった面もある。反面で、民族差別・性差別・地域差別・障害者差別など、差別に対する感覚が一段と強く意識されるようになった時期でもあった。

このような時代状況を考えれば、「戦後歴史学」に大きな変化が生じたのは当然といえれば当然であった。

鹿野の『「鳥島」は入っているか』は、こういう諸動向に立ち入り、かつ、それら諸動向をふまえて書かれた多数の著作を、目を見張るばかりに丹念に紹介しているが、そこには「社会史」といわれるような認識方法に基づく作品が多かった。その広がりや、鹿野は「一九七〇年代以後の日本の歴史学界の動向は、この「社会史」台風を抜きにしては語れない」（七、99）と表現している。また、阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』（平凡社、1974年）、網野善彦『無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』（平凡社、1978年）などが「範疇としての社会史の成立を、だれの眼にもしるく印象づけた作品」だとした。

鹿野は、『「鳥島」は入っているか』で、社会史の成立から展開、登場の背景やその意義、問題点などを論じているけれども、ここではそれに立ち入らない。やがて鹿野自身も社会史的な作品を世に問うに至った。『思想史論集』第五巻に収録された『健康観にみる近代』（2001年）と『兵士であること 動員と従軍の精神史』（2005年）がその代表的なものである。

鹿野は、『思想史論集』を構成する際に、全巻の巻頭に「まえがき」を、巻末には「問いつづきたいこと」を置いた。そこでは、各巻の構成などがそれぞれに説明されていることは当然であるが、ほとんどのばあい、鹿野の「自分史」あるいは「個人史」にかかわることも書きこまれている。第五巻のばあい、その「まえがき」は次のようにはじまる。

愚痴めいていて気がさすが、「生っ白い」という形容が、少年時のわたくしには付いて回った。そこには、十五年戦争下にあって、軟弱でオトコらしくなく、御国の役に立ちそうもないとの、暗黙の非難があった。

この文を含む記述は、『健康観にみる近代』『兵士であること』の執筆にあたっただけの「自分史」的な由来の説明であって、この2冊の問題意識自体は、歴史学界における社会史の「流行」に伴って浮上したのではないことを説明する含みもある。

だが、これら2冊を作品として成り立たせたことを、こうした「自分史」的な説明だけに帰することはむろんできない。論文集でもある『兵士であること』に収められた「村の兵士たちの中国戦線」の冒頭に、「あらたなうねりが軍事史研究の分野に寄せてきた、と半ば身近に感じ半ば遠望する気持ちでいる。」とあって、数々の著作が列挙されている。そしてそこに、「軍事史が、しだいに力点を民衆と軍隊、民衆と戦争への関係へと移してきた」といえるし、「近年における兵士を主題とする作品の輩出は、そのように蓄えられてきたエネルギーの爆発を、じつは意味している」とする。そして、それを示す数多くの文献が並べられているが、3人の歴史家のばあいにしぼって要約すれば、次のようである。

- (1) 『軍事史』(東洋経済新報社、1961年)、『太平洋戦争史論』(青木書店、1982年)を著した藤原彰(1922～2003)が、『餓死した英霊たち』(青木書店、2001年)を出した。
- (2) 『日本帝国主義史論——満州事変前後』(青木書店、1975年)などを著した江口圭一(1932～2003)が、小原孝太郎著『日中戦争従軍日記——輻重兵の戦場体験』(法律文化社、1989年)を芝原拓自とともに編集した。
- (3) 『国民教育と軍隊 日本軍国主義教育政策の成立と展開』(新日本出版社、1974年)、『日露戦争の軍事史的研究』(岩波書店、1976年)を著した大江志乃夫(1928～2009)が、『兵士たちの日露戦争 五〇〇通の軍事郵便から』(朝日選書、1988年)を出した。

このように並べると、藤原・江口・大江という近現代史家たちが、いずれも「兵士」を軸にした著作(江口のばあいは編集)を1980年代以降に出していることがわかる。この3者が、これ以降もっばら「社会史」的作品を出すようになったということではないけれども、「兵士」への着眼が共通する問題意識として前面に出てきたことは、書名からもうかがうことができるし、鹿野のばあいも、その流れのなかにあった。

「兵士」への着眼にはまた、日本国内における戦争による「被害者」意識の重視に対し、「加害者性」に眼を向けることの重要性を説こうとする含みもあった。「兵士」はいやおうなしに戦場にひき出され、「敵」を殺す運命にあるからである。さらに、「兵営社会」のあり方がまた、戦後日本社会のあり方と通底する側面もあったといえよう。いずれも、「戦史」とは異なる歴史記述という色彩をつよく帯びた。さらにいえば、「被害者性」をもっばら強調する諸潮流への批判という含みもあったはずである。

とはいえ、1980年代以降に出た社会史的著作には、「戦後歴史学」を陰に陽に否定するようなものが次々と現れたが、問題は、社会史的著作に限らなかった。

歴史学をめぐる環境は、日本でも、また欧米を中心とする海外でも、一九八〇年代、さらに九〇年代に至って劇的に変化した。〔中略〕歴史学の内側および外側で、ないし外側からの強烈な刺激を内側に受けるかたちで、歴史学に大変動が起きた。(七、413)

この「強烈な刺激」として、鹿野は、第1に、「豊かさや民主化の実現として、目標とされてきた「近代」の達成そのものが、あらたな抑圧・疎外・葛藤・操作・破壊等々の矛盾を激発させていったこと」、第2に、「未来への道標を自認してきた社会主義国家が、ソ連のそれを最大の指標として、解体したこと」をあげている。

そうした時期、「戦後歴史学」に対し、「急速に高まる大波として歴史修正主義が押し寄せてきた」が、この「歴史修正主義」は、「過去の問い直しを担い、戦争の正義化、侵略性の否認、戦後体制への批判を眼目とし、それを根拠づけるために、世界における日本という国の特殊性の強調に及んだ」(七、415以下)。

そして、「歴史修正主義」だけでなく、「歴史構成主義」や「国民国家論」も台頭してきた。『思想史論集』第七巻の巻末に置かれた「問いつづけたいこと」は、こうした動向に

対する批判に紙数を費やしている。その記述は、歴史学のいわば認識論的な議論であるが、ここでは、この説明に替えて、より簡略な説明を引いておこう。

それによれば、日本社会は、「戦争の経験、植民地をもった経験、オトコ本位であった経験、豊かとなった経験などが、この社会に問い直しを迫ってやまない」といい、その「問い直し」の著作が、数多く生み出されてきた。しかし、半面、「そういう問い直しの機運に苛立つ心が、ここ十年来の状況によっても加速されて、「日本」への固執力を強めている」と判断するのである<sup>(注12)</sup>。この「苛立つ心」を背景にもつとするのは、「戦後歴史学」に対抗するかたちで1990年頃以降に台頭した歴史学の背景を、的確・簡潔に把握したものであるが、それは歴史学的な著作のみにみられる現象ではない。

## 沖縄論

このように現状を把握したとき、「日本」への鹿野の問い直しがいちだんと深まってゆく。そのテーマとして選び取られたのが「沖縄」であった。

鹿野の沖縄への関心は、長く深い。その発端は、先にふれたように、戦時中の岸和田という地域社会で、沖縄出身者として生きた中年女性・儀間カマドが鹿野少年に声をかけてくれたという経験である。

とはいえ、沖縄のことを鹿野が文字にしたのは、1960年代末のことだという。60年代末に刊行された『資本主義形成期の秩序意識』は、鹿野の38歳のときの大著である。「明治期における日本人の精神動態を主要な対象とする」この作品は、「日本人の精神動態のなにを対象としているのか」と自ら問い、「すべてをとという途方もないこたえ」だとしている<sup>(注13)</sup>。しかし、ほぼ40年後の『思想史論集』第三巻「まえがき」(2008年)には、この『秩序意識』には、「沖縄は片鱗でも姿をみせないのである」と回想されている。

それ以降、鹿野は次第に「沖縄」に接近していくことになるが、『思想史論集』刊行以前に単著として出版された作品としては、『戦後沖縄の思想像』(1987年)と『沖縄の淵 伊波普猷とその時代』(1993年)がある。前者の一部が『思想史論集』第三巻に収められて、II『琉大文学』論、IIIの「大城立裕の文学と思想」(これが第三巻の半分以上の頁を占める)となり、後者の伊波普猷論が第四巻に収められた。こうして、沖縄の思想と文学を扱ったものが『思想史論集』7冊中の2冊を占めることとなった。

『沖縄の淵』は、刊行こそ1993年であるが、鹿野が沖縄学の創始者というべき伊波普猷と向きあおうと決心したのは、1970年代のことだったという。『伊波普猷全集』全11巻(1974～76年)の刊行と、ほぼ時を同じくしている。なぜ伊波普猷だったか。「伊波普猷へのわたくしの関心は、代表的な著作と目される『古琉球』(一九一一年)を読んでの驚きに始まっている。」(四、6)として、『沖縄の淵』では、その「驚き」を分析的に記述している。

また、琉球大学の学生たちのいわば同人雑誌『琉大文学』(1953年～73年)について、のちに鹿野は次のように回想する。

わたくしは『琉大文学』を、五〇歳になるころようやく読んだのですが、自分と同じ世代の人びとが、こんなに鋭く深く考えていたのかとまったく驚きました。

そして、鹿野は、「沖縄の思想における文学の比重の重さ」を強調する。

文学がそのまま思想史になるというのではないにしても、文学なくして思想史は成り立たないというほどの比重をもってきたと思います<sup>(注14)</sup>。

というのである。こうして、『思想史論集』第三巻は、『琉大文学』論、大城立裕論が多くの頁を占めることになった。

幼少期からの「強烈な記憶」、そして、伊波普猷や『琉大文学』に媒介されて、大城立裕の膨大な作品群や、『沖縄戦史』や、新崎盛暉『沖縄同時代史』全10巻+別巻1冊(凱風社、1992年～2005年)、さらには沖縄からの発信者たちの数多い著述などを読み込み、沖縄にとって「復帰」とは何だったか、などの問題をつきつめて考えていくことになる。沖縄について考え、書くことは、鹿野にいかなる変化をもたらしたか。

沖縄の戦後という範疇を立てたことによって、それまで日本戦後史と意識してきた分野が、「本土」戦後史にはかならなかつたと、痛烈に思い知らされた。(三、vi)

これは、沖縄と「本土」のあいだの途方もない落差の問題の認識である。

鹿野は、『思想史論集』刊行後、法政大学沖縄文化研究所の主催するカリキュラムの一環として、「沖縄を考える」という総合講座を担当し、その内容が最初にふれた『沖縄の戦後思想を考える』となるのだが、当時を回想して、次のような感慨が述べられる。

作業を始めたときには、沖縄にはこんなにも惹きこまれてゆく思想が満ちているのに、どうしてそれが、日本戦後思想史のなかに位置づけられないでいるのか、という不満がありました。というか、逆にいうと、たとえば新川明さんの思想とか、岡本恵徳さんの思想とか、大城立裕さんの思想とかを含まない、ないしはそもそもその存在に気づこうとしない日本思想史とは何か、という不信がありました<sup>(注15)</sup>。

このような問題意識をもつ鹿野の議論の内実だが、スペースの関係で、『思想史論集』第四巻の「II 伊波普猷以後」で鹿野が論じている目取真俊についての叙述から、その一部を抜き書きするにとどめざるをえない。

目取真俊は、戦後世代のなかから、沖縄戦への固執を軸として評論を含む作品世界を繰りひろげる表現者・思索者そして行動者として出現した。(四、378～379)

目取真にとって沖縄戦は、原点であるばかりでなく今につづくものとしてある。「沖縄基地の撤去という困難な課題を克服することなくして、沖縄戦の終わりもありはしない」、「沖縄戦は常に私たちの思想の原点にある」(四、379)

第二次世界大戦で日本政府は沖縄を「捨石」とした。それにつづく戦後、アメリカは沖縄を太平洋の「要石」とした。しかし目取真が、「米軍基地 県内移設のシナリオ」(二〇〇〇年)で、「日本政府に対して沖縄がこれほど隷属の地位に甘んじたことはあるまい」というとき、彼の脳裏には沖縄がいま「捨石」+「要石」の地位にあると映じているのではあるまいか。(四、381)

このような観点から鹿野は『思想史論集』全七冊の刊行後も、沖縄研究を孜孜として続けてきた。だが、衝撃的なことが起こった。そのことを、鹿野はある座談会で述べている。その鹿野発言に付された注記を拝借して説明しよう。

二〇一三年一月二七日、「NO OSPREY 東京大会」が開催され、沖縄県内からは三八市町村長と四一市町村議会議長など大上京団を組織、集会とパレードが行われた。翌二八日には共同代表の翁長雄志那覇市長（当時）らが安倍晋三首相と面談、「建白書」によってオスプレイ配備反対、普天間飛行場県外移設を訴えた。上京団を先頭にしたパレードに対して、街頭から沖縄を非難するヘイトスピーチが浴びせられた<sup>(注16)</sup>。

1月27日に、この沖縄の建白書行動に出かけた鹿野は、「ヤマトの人間の建白書行動に対する冷たさというべきものを、あの集会に参加して肌で感じました」<sup>(注17)</sup>と語った。その衝撃が、自ら運動にかかわることの少なかった鹿野を、この小論の冒頭に記したような運動に駆り立てた一要因であろうと、私は想像する。

冒頭に紹介した「戦後沖縄・歴史認識アピール」に、「日本と沖縄の戦後史は同列に扱える性質のものではありません」とある。1945年の敗戦から52年の講和条約発効までの米軍の占領政策、講和条約以降の「ヤマト」と沖縄のあり方、それだけ考えても、「同列に扱える性質のもの」でないことは明らかであるが、そういう認識が、ヘイトスピーチを浴びせかけた人びとはもとより、多数の「ヤマト」の人びとにも、はなはだしく欠落しているということでもあって、驚くべき「分断」状況である。沖縄にあってそのことを問いかけてやまない目取真俊の認識を、鹿野が強く押し込めているのも当然である。

こういう日本の現状にどう応答していくべきかという問いを、鹿野は投げかけている。この小論は、こうした問いを投げかけるに至った鹿野思想史学の航跡を、『思想史論集』によりながらたどるものであった。

## 注

(注1) この小論では、年月日などの数字の表記に関し、アラビア数字と漢数字が混在しているが、引用元の表記が漢数字であるばあいは、そのままの表記とし、地の文ではアラビア数字で表記している。鹿野政直『現代日本女性史』も横組みであり、数字の表記については、ここに記した方式で通している。ここでも、その方式にしたがう。

(注2) 鹿野歴史学を考察した著作に、赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり・戸邊秀明編著『触発する歴史学 鹿野思想史学と向きあう』（日本経済評論社、2017年）があり、9人の執筆者が多角的に鹿野思想史学を論じている。

(注3) 鹿野は、『岩波講座 日本通史』（1993～96年）の編集委員のひとりだったが、この『日本通史』の構成を考えたとき、「近代というものが非常に遠くなってしまっているという気持ちがおさえがたく起こりました」と回想している。西川正雄・鹿野政直対談「どうとらえるか——「近代」と近代史研究」『歴史評論』（第562号、1997年2月号）4頁。

(注4) 鹿野『歴史を学ぶこと』岩波書店（岩波高校生セミナー1）、1998年、30頁。

(注5) この「戦後歴史学」の歴史的な回想としては、網野善彦『歴史としての戦後史学』（洋泉社、

- 2007年。原本=日本エディタースクール出版部、2000年)も参照。
- (注6) この鼎談は、『色川大吉対談集 あの人ともういちど』(日本経済評論社、2016年)に収録されている。引用は、この本による。
- (注7) 鹿野「なぜ沖縄を学ぶのか いま、「わが心の沖縄」を語る」『図書新聞』2495号、2000年7月22日。
- (注8) 「座談会 歴史の自立をめぐる」(鹿野政直、新川明、川満信一、松島朝義、富山一郎、森宣雄、戸邊秀明)、森・富山・戸邊編『あま世へ 沖縄戦後史の自立にむけて』(法政大学出版社、2017年)所収、181頁以下。
- (注9) 鹿野は、儀間カマドとの出会いを「いわば私の沖縄の発見、です」と語った。「インタビュー 沖縄の歴史意識のいま、にむきあう」『けーし風』第60号、2008年9月、26頁。
- (注10) 資料の刊行が「民衆史」に限られないことは当然で、鹿野編『日本の名著』37「陸羯南 三宅雪嶺」(中央公論社、1971年)との関連でいえば、『陸羯南全集』(みすず書房、1968年～85年)のうち、書簡などを収めた第10巻の刊行は1985年となった。
- (注11) 沖縄政府編集・発行『沖縄県史』第9巻「沖縄戦記録1」1971年6月。
- (注12) 鹿野『日本の近代思想』岩波新書、2002年、2頁。この本は、『中日新聞』(『東京新聞』)の連載(2000年秋)に加筆して成った作品である。
- (注13) 鹿野『資本主義形成期の秩序意識』筑摩書房、1969年、「まえがき」
- (注14) 鹿野『沖縄の戦後思想を考える』31、38頁。
- (注15) 鹿野「沖縄史の日本史からの自立」、前掲『あま世へ』所収、136頁。
- (注16) 前掲「座談会 歴史の自立をめぐる」184～185頁の\*6。
- (注17) 同、184頁。